

12:1 さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ知ることを知っていただきたいのです。

12:2 ご承知のように、あなたがたが異教徒であったときには、どう導かれたとしても、引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした。

12:3 ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。

12:4 さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。

12:5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。

12:6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。

12:7 しかし、みな益となるために、おののに御霊の現われが与えられているのです。

12:8 ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、

12:9 またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ、

12:10 ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人

には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。

12:11 しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おののにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。

次にパウロは御霊の賜物について教えます。これはすばらしいものですが、残念なことにその賜物の違いによって分裂・分派が起きることがあるのです。そうならないようにパウロは賜物は違ってもみな同じ聖霊から与えられるのだから1つなのだとして強調します。

まずクリスチャンはみな聖霊の促しによって救われた聖霊の宮であることが大前提として述べられています。聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできないからです。ですから同じ御霊によって賜物が与えられているので、分裂・分派が起こってはならないです。

ここでは賜物のほかに、奉仕と働きも同じように主からのものと書かれています。原語では賜物は「カリスマ」で、恵として与えられる能力です。奉仕は原語では「ディアコニア」で、その人に任せられた係りや職務などを表します。働きは原語では「エネルギー」で、力を発揮して主の栄光を表すようなものを表します。これらは3つに分類するというのではなく、どんな人のどんなわざもこれら3つの側面があると考えるべきでしょう。分離できるものではありません。

大切なことはどれも主から与えられているということです。ですから自分の賜物、奉仕、働きがすばらしいからと言って誇ることもいけませんし、こちらの方が優れていると言ってもそれは間違いなのです。

それはクリスチャン同士でも、グループ同士でも、教会・教団・教派間でも言えることです。自

分とは違う賜物を持つ人（たち）を、主が与えられたことのゆえに感謝しましょう。また自分の賜物を主のゆえに感謝し、その賜物を大いに生かしてゆきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

